

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

石器が鉄器に、馬車が自動車に変わっていくようには文学が変わっていかない事実は、誰しもよく知っている。自動車が発達すれば馬車は滅び、鉄器がひろまれば石器は用済みになる。こうして技術や物質生産の世界では、古いものは次第に、あるいはどしどしハイブツとなり、博物館に放りこまれてしまう。が、文学は必ずしもそうでない。むしろ文学にも、それに似た淘汰がま
るでないわけではなく、また技術の発達^Aということもあるのであって、たとえば『万葉集』と『新古今集』の歌をくらべてみれば、前者にない新規の表現技法が後者に発達してきているのがわかる。技法のこういう発達は、かなり厳密に確定できる、文学史におけるほとんど唯一の要素といえるかもしれない。ところが文学では技術はたんに新しい可能性を約束するのみで、それを目安に作品の位置を決めるわけにいかない。

何が新しく何が古いかは、文学上、かなり厄介な問題^②ということになる。漱石の小説の方をあらゆる種の現代小説よりかえって新しいと感じたにしても、時勢おくれであるわけではない。『万葉集』をその後の歌よりいいと感じたからといって必ずしも逆だちであるわけではない。『枕草子』には「遠くて近きもの。極楽、舟の道、男女のなか」とあるが、古典もその一つに加えてよかるうか。明治の話だが、正岡子規は遠い万葉の歌を一気にたぐりよせて短歌革新を成就^③した。文学において古典という奇妙なものの成立してくる根拠が、このへんにかくれているらしい。

ある時代の文学は、それ以前の文学のもっていたもろもろの機能や要素をすべて包みこみ総合しながら出てくるのではなく、むしろ、あるものを失うことによってあるものが得られるという

15

10

5

〔出典〕
西郷信綱
『日本古代文学史』

歴史的矛盾がそこにはあると見える。だから古代から近代へと失われていく何ものかがあり、同時に、失うことによつて獲得される何ものかがあるというわけで、古い作品がわれわれに魅力を与えるのも、われわれの手持ちでない、だが持ちたいと欲する新しい何かが、時としてそこに潜在していると感ずるからにちがいない。

よく古典の永遠性[、]ということがいわれる。が、^Bそののしかける^{かんせい}陥穽^におちこんではなるまい。かりにある作がずっと読まれつづけてきたにせよ、享受の中味は時代で変わってきているし、またそれはこれからさき必ず変わっていく。しかも、どう変わっていくか^④モクソクできない。われわれの現にありがたがつている作がよまれなくなることだつてないとはいえず、思いがけぬ作が浮かびあがつてくることもありうる。戦前戦後をふりかえってみても、その間あるものが死に、あるものがよみがえつてきたのを見とどけることができる。われわれじしん、この絶え間ない變化のなかにいるのであつて、自己の位置を絶対化すると自己を凍結させることになりかねない。何をどのように古典として設定するか、つまりその選択と解釈は、かくして時代によつて変容を

うける。われわれはもう本居宣長と同じようには『古事記』や『源氏物語』をよまぬだろうし、真淵や子規と同じように『万葉集』をよむこともしないだろう。研究がすすみ新事実を知つたためだけではない。それはむしろある。が、そのみと考えるのは学者の思いあがりで、いっそう根本的には時代の文学経験や文学概念が、宣長や子規などの時代と異なる性質のものになつてゐるためである。

誰がどのように作品をよむかということをはなれて作品そのものの永遠性を論ずると、どうしても形而上学^{けいじょうがく}を作りあげ^⑤るシギになる。作品そのもの、というものはどこにも存在しない

し、誰にも経験できない。では、古典と呼ばれるものはどこにあるかといえ、それは過去と現代のあいだ、つまり過去にぞくするとともに現代にもぞくするというほかない。その作られた時代とともに滅びず、現代人に対話をよびかけてくる潜勢力をもったもののみが古典である。そしてこの過去と現代に同時にぞくするものを、複雑に入りくんだ歴史的人間活動としてとらえようとするのが、文学史の役目ということになる。文学史の記述に、一筋縄ではいかぬ厄介さがつきまとうのもこのためである。

斎藤茂吉は『柿本人麿』のなかで、自分は何としても人麿の偉さに及びがたいという歎声を発し、真淵は『歌意考』でやはり万葉にかんし、「あはれ、あはれ、上つ代には、人の心ひたぶるに直くなん有りける」と憧憬の念をのべ、人間が「設けず、作らず、誣ひず、教へず、天地に適ひて」生きた一つの理想時代をそこに見てとらうとしている。

どの時代の文学にも、他の時代の文学でおきかえのきかぬ本領のようなものがあるのだが、なかでも古代の文学は特殊性をもっているといえる。それは古代が、原始共同体の母胎から出てきた最初の社会であり、文字をもつに至った最初の文明社会であり、はじめて文学が文学になった時代であることから来る。『万葉集』が日本詩歌史の上でしめてきた独特な位置も、それが共同的な歌謡を基礎につくられた多少とも個性的な歌であるという事実を外しては説明できまい。しかもこれは、民族の歴史で二度と経験できぬ一回きりの段階であった。茂吉が人麿にはかなわぬと歎ずるゆえである。詩的生産にかんするかぎり、時のめぐみがまるでちがつていた。万葉を規範として意識し、それにもどることが自己更新であるようなつきあいかたが、こうして生まれてくる。これは古代の古典の一つの代表的な享受法であったといえる。

15

10

5

問一 傍線部①～⑤について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はカタカナに直せ。

問二 傍線部A「技術の発達」という点において、文学の歴史（前者とする）は、道具や乗り物の歴史（後者とする）とどう違うというのか。説明せよ。

問三 傍線部B「そのしかける陥穽」とはどういうことか。説明せよ。

問四 傍線部C「過去と現代に同時にぞくするもの」とあるが、「古典」が「過去と現代に同時にぞくする」とはどういうことか。説明せよ。

問五 傍線部D「時のめぐみ」とあるが、柿本人麿には、どのような「時のめぐみ」があったのか。説明せよ。